



18

バイトは性奴隷  
プラモ屋中学生

父は失踪。母も出て行った。

まだ◎学生の僕は誰を頼っていいかとんとわからなくなった。

だから手当たり次第に近所のお店で「雇ってください」と回ったのだ。

当然誰も雇ってはくれない。それどころか「お父さんやお母さんは？」と聞き出そうとしてくる大人が大半で嫌気が差した。

だってぼくは認めたくなかったから。

自分が父親にも母親にも捨てられた、かわいそうな子どもなんだって。

「う～ん、まだ◎学生でしょ？」

……ここも同じか。がくりと肩を落として去ろうとする。

「待って」と野太い声が呼び止めた。

「頼れる人がいないんだね？」

「……はい……」

恰幅のいいエプロン姿の店主はぼくを頭のとっぺんからつま先まで舐めるように見まわしてくる。◎学生というだけで不利なのに　その上小柄で顔もとくに幼い。△学生と間違われることだってあるくらい。

どこからどう見ても子どもだし、やっぱり、働くななんて無理なのかな……。

「いいよ。ウチで働きなよ」

「えっ!？」

それが、僕と【ご主人様】の出逢いだった。

そこはひなびたプラモ屋。並べられた箱の大半は埃を被っていて不衛生だ。

ぼくはまずはハタキで店内の掃除をしたいと申し出た。

店は暇なものだった。常連さんが数えるほどしかおらず、またこんな小さな田舎町では新規客も見込めない。おかげで店内は一日のほぼすべての時間が無人だ。

ぼくは無邪気に「それでやっていけるんですか」と聞こうか迷ったが、気分を害して追い出されてはたまらない。肅々とハタキがけに専念した。

それにしても埃がひどい。暇なら本なんて読んでいるんじゃなく掃除すればいいのに。

カウンターで座ったままの店長を横目に、少し手つきが乱暴になる。思いのほか埃が立って激しくむせてしまった。店長が本から顔を上げる。

「ちょっと待ってね」

何やら手元をごそごとと漁り出した。そこでなぜだか「目を閉じて」と言われたのでその通

りにする。店長が近寄ってくる気配。目の前まで来ると、なぜだか後ろにまわってきた。  
つむじを覗かれているような気がする……………。  
奇妙な感覚に背中がぞわりとした。両耳に触れられて、そしてぼくの口に何かが被せられる。  
「ン……？」  
「健康に悪いからね。これを付けてやって」  
「え……………」  
「もう目を開けていいよ」とくすくす笑われた。口元を手で確認する。マスクだ。  
助かる……けど、なんかこれ湿っていないか？　こころなしか変な臭いもするし…………。  
「あ、ありがとうございます……」  
「よろしくね」  
まあ臭いもう慣れて気にならないし、いいか。

さっきまでの息苦しさはなくなって思いのほか歩った。  
手の届くところは終わってしまったので、うろと仕事を探す。  
上…………。  
棚の上もきつと埃が積もっているに違いない。  
脚立の使用許可を取ろうとしたけれど、店長はいつの間にか入ってきた常連と楽しそうに話している。割り込むべきではないな。そう判断して、自分で倉庫の奥にあった脚立を見つけて出し、持って来た。  
よし…………。  
登ってみると思った以上に汚れている。これはやり甲斐があるぞ。

「あきらくん、何やってるの」  
お客さんが帰ったらしい、気付いた店長が慌てて駆け寄ってきた。  
「高いところなんてやらなくていいよ。落ちてケガでもしたら大変だ」  
「大丈夫です。これくらい」  
「まったく……それじゃあ私が支えるからね」

むにゅっ。

むにゅっ？

自分がお尻に感じた感触を言語化して繰り返す。  
それでも意味がわからなかった。  
振り返って、店長がぼくのお尻を鷲掴みにしているのを実際に見るまでは。  
「あっ、あの、なんでお尻をっ？」

「ああ、いいんだよ。こうやって押さえているから安心して掃除して」  
なんでよりによってお尻を……脚立を支えてくれたらよくないか……？  
思いながらも、やっぱり店長の気分を害したくないので黙って掃除を再開した。  
積もった埃がどんどん落ちてくる。まるで終わりが見えない。

「はあ、なんか痒くなってきたなあ」

「あっ。店長ほこりアレルギーですか？」

「いや……どうも手がね……あっ」

途端に店長は驚愕みにしていたばくのお尻を手放す。内心ホッとしたけど「どうしたんですか？」と聞かざるを得ない。

「ああ、いや、実はデニムアレルギーでね……」

「デニムアレルギー？」

聞いたことがない。いろんなアレルギーがあるとは知っていたけど、まさかデニムアレルギーとは。

あっ、それじゃあもしかして……。

「ぼくのデニムのショートパンツで、手、痒くなっちゃったんですか……？」

「そうみたいだね。それじゃあ悪いけどそれ、脱いでもらえる？」

「えっ」

「支えないわけにはいかないからさ」

なんでわざわざ脱がなきゃいけないんだ。最初から支えなんていらなに。

言い返す前に僕の足首にすんと落ちる感覚。

デニムのショートパンツと……名前の書かれた白ブリーフが。

「え！？！？！？」

「おやおや、ごめんよ。まあこっちのほうが手触りがいいし、いいでしょ」

「いつ……」

むにゅむにゅ。挨拶がわりとばかりに店長はぼくのお尻をモミモミして、しっかりと下から掴んできた。

あ……お尻も、ち、チンチンも、出ちゃってる……。

「あ、あの……なんか、これ……」

「気にしないで楽しんでよ。お店でおチンチン丸出しでお仕事するなんてめったにできない経験でしょ？」

この人、一体何を言ってるんだろう……ぐふふ、ぐふふって気持ち悪い笑い方しながら、ずっとお尻をモミモミしてくるし……。

ああ、それでも掃除を続けなきゃ……身を乗り出すたびにちんちんがプルプルして、恥ずかしいよう……。

「おほ～、いい眺めだねえ」

「ンンッ……？」

すりすり、すりすり。人差し指でお尻の割れ目をなぞられて妙にくすぐったい。  
なんだかモミモミも強くなってきたし、まるでお尻の穴を見るみたいに、両手で、割り開いてくるし……あれ、もしかしてぼく、チカン……されてる……？

「や、やめて、ください、んッ」

「ああっほら、暴れないで。落ちたら大怪我だよ？」

「んふう～～ン……」

両手で、思いっきりモミモミされてる……。

支えるだけならこんなことしなくていいはずなのに……ていうか、店長は男の人、だよね……  
…ぼくも男なのに、なんでこんなエッチなことするんだろう……？

「はあ、はあ、手が疲れてきたなあ」

「じゃ、じゃあ、もう降り、」

「仕方ないから僕の顔面で支えてあげるよ！　ぶふふっ♡」

「あひゃあっ！？」

むにゅうう。手よりももっと大きくてゴツゴツとしたものがお尻に押し当てられる。

凹凸があって、なんか、熱い……息？

店長、僕のお尻に顔、埋めてるの……！？

「すんっすんっ！　はあ～いい匂い♡　くらくらしちゃうよ、あきらくん♡」

「あ、あ、あ……やめてえ……」

お尻の穴を鼻くつつけて嗅がれて、逃げようとする両腕を引かれて店長の顔面に座るような格好になってしまった。生ケツで。

ジュルジュルと水音が響いて、何かぬるぬるしたものが僕のお尻の割れ目を往復している。  
舐められているんだと気付いたけど、もう遅かった。

「んっ、んめ♡　んめ♡　◎学生の清純アナル♡　初日でここまでデキるなんてっ♡」

「ああん、いやあ～～！」

「逃げるなっ！！」

脚を掴まれて座った体勢で固定される。お尻の穴に舌が埋め込まれて、くぶくぶくぶくぶ……  
…じゅぽっ……じゅぽっ……ああ、ナカ、舐められちゃってる……。

何が起きているの……。

なんで、こんなエッチなこと、今日知り合ったばかりのおじさんにサレちゃってるの……？

「ふがふがっ、んんめっ、ずびぶちゅっ！！　あきらくん、美味しいよ！！」

「やっ、やだあっ、ふええ～ん……」

「ああっ可愛いよ！！！！！！」

それから僕は脚立の上で、一段登ってきた店長にお尻舐められて、金玉も食べられちゃって、  
ちんちんは手でシュコシュコされて震えながら我慢した。

大声を出したってだれにも聞こえやしない。

それに店長、すごく興奮しているから……逆らったら何をされるかわからないって、怖かつ

たんだ。

けど、それが間違いだった。

「ああっもう我慢できない～！ さっそくくださいちゃおう！ ぐひひひ♡」

「えっ？ えっ？ あっあっ……あう、なに、てんちょ……」

店長はぼくを完全に抱っこすると、ぼくのお尻の割れ目に大人チンコを擦り付けている。

逃げなきゃって思うのに、羽交い絞めにされた身体は全然動かなくてもう諦めるしかなかった。

穴に先っぽが引っ掛けられて、そのままグッ、グッと押し込まれる。

「おおっ、お～～～～♡」

「やっ、あっ、あ、」

ズップン♡♡♡♡♡♡

「ああッ！？！？！？！？！」

「むほ～～♡♡♡ やった～～～～！！！！！！♡♡♡♡♡♡」

「ああっ……」

\*\*\*\*\*

サンプルはここまでです。

続きは製品版でお楽しみください。